被災地派遣レポート＜７８回＞

青少年・治安対策本部　総合対策部
安全・安心まちづくり課　針生　久美子さん

１　派遣先

岩手県復興局企画課

２　派遣期間

平成２４月４月１日～平成２５年３月３１日

３　組織構成

- 本庁（盛岡市）以外に、４広域振興局体制
- 復興局内は、局長（副知事）、副局長、復興担当技監以下、５課約５０人体制（総務課、企画課、産業再生課、まちづくり再生課、生活再生課）

４　主な担当業務

（１）復興交付金事業計画策定

- 庁内関係部署及び県内市町村の事業計画を取りまとめ、復興庁岩手復興局へ提出。交付可能額通知をうけた後、修正計画を提出し、全事業をHPで公開。
- 事業計画提出時及び交付可能額通知時には、事業内容及び申請額等を取りまとめ、内容を分析のうえ、上層部及び報道機関向け報告・情報提供。
- 復興庁による各市町村での計画策定支援に随行し、県事業説明対応、市町村事業について検討結果をまとめ、報告。
- 交付申請手続、事前着手申請手続等取りまとめ。
- 岩手復興局及び関係省庁（主に農林水産省）との調整。
- 新規事業掘り起こし（ex.砂浜再生事業）。各市町村へのヒアリングを行い、問題点や広域的に必要な措置等洗い出し。

《三陸鉄道北リアス線　復旧工事の様子》

（２）県復興実施計画進捗状況進行管理、進捗指標の決定

- 県庁内事業部局（総務部、商工労働観光部、保健福祉部、農林水産部、県土整備部、政策地域部、教育委員会事務局）との調整。
- 毎月の進捗状況を取りまとめ、復興本部員会議（毎月１回開催。知事・副知事以下関係部長、岩手復興局長出席。報道機関に対しては完全にオープン。各広域振興局長は

テレビ会議にて参加。）における資料を作成し、提出。作成資料についてはHPで公表。

（３）復興特区制度の推進

・保健・医療・福祉特区について、岩手復興局や保健福祉部との調整。情報提供。

５　岩手県庁の職場環境等

- 職員数や事業数が少ないこと、全体的に風通しのよい職場風土であったこと等により、部局間のやりとりはスムーズに行われているようであった。
- 全職員が共有できる電子サーバを用いていることから、情報のやりとりがしやすかった。
- 復興事業に限定されると思われるが、知事・副知事に頻繁に業務報告やレクを行っており、一般職員と上層部との距離が、都庁に比べると、非常に近く感じた。
- 沿岸までの出張では、最も近い宮古市まで片道２時間かかる。最も遠い洋野町、陸前高田市までは片道２時間半～３時間かかるため、朝一番の打ちあわせが入った際は、前日泊の場合もある。冬期は雪道のなか山を越える必要があるため、更に時間がかかり、大変さを実感した。

６　復興の現実

（１）震災後、２年を経過してもすすまない復興

H25年３月に県内初の災害公営住宅が完成したが、仮設住宅入居者数からすると、あまりに進行が遅い。また、壊滅的な被害を受けた大槌町や陸前高田市は今も一面更地のままである。その大きな原因として、防災集団移転促進事業や漁業集落機能強化事業をはじめとする用地確保が非常に難航していることがあげられる。これらの土地権利問題や保安林解除問題では、現行制度・法律の壁が円滑な事業の進行を妨げていた。また、膨大な資料の作成の必要があったことも、作業の進行を妨げる一因になっていたのではないかと思う。

復興の進行の遅さから、地元に帰ることを諦め、避難先での永住を選ぶ方も少なからずいることも残念ながら事実である。

（２）県民の思い

派遣中に常に感じていたのは、非常に郷土愛があるということ。東京は、全国から人々が集まり、出身地もバラバラであるため、地方に比べると良くも悪くも愛着は薄いように感じる。

その土地で生まれ育ち一度も地元を離れることのなかった人々が、一瞬にして住む場所も、友人も、慣れ親しんだ景色も奪われるということは、どれほどの悲しみであったか、想像を絶するものがあった。被災した方や、そこの出身者から聞く「ここには昔、こんな店があった。こんな景色が広がっていた。子供の頃、この海にみんなでもぐったんだ。」と

いう話を聞くたびに、この２年の間に乗り越えた絶望や、今も抱えている深い悲しみを痛感した。

　それでも、全てを失っても、地元に残ることを選ぶ方々の思いに応えようと必死で働く自治体職員の思いは本当に強い。「うちは必ず復興します。まだまだこれからです！」と、ある自治体の職員が力強く言っていた。

《海岸災害復旧工事の様子（奇跡の一本松の近く）》

７　印象的だった出来事

　警視庁高輪警察署から、港区で廃校になった中学校の備品を無償で送ってもらった。希望者をＨＰで募集し、宮城県気仙沼市（NPO 法人）、陸前高田市（七夕祭り実行委員会）、大船渡市（NPO 法人）、釜石市（仮設住宅住居者）に届けてまわった。皆、「東京からわざわざありがとう」と、喜んでいた。

　以前、青少年・治安対策本部で一緒に働いていた岩手県出身の警視庁職員が「地元のために何か出来れば」と尽力してくれたことによるものであり、非常に感謝している。

８　派遣を終えて

　一年を振り返ると、あっという間に時間が過ぎたように感じる。派遣当初は、被災市町村内の地区名や復興事業名、事業の流れを覚えることに精一杯であったが、慣れていくにつれて、自分が何をできるのかを考えて過ごすようになった。被災地のため、被災者のために役立っているのかと悩むことが多かったが、自分には、少なくとも、被災市町村役場や現場で働く職員の負担を少しでも減らしてあげることはできるのではないかと考え、相手の立場に立ち仕事をすることを心がけた。

　このような経験がなければ、この先、独りよがりな仕事の仕方をしていたかもしれないと思うと、人間として大きく成長できる貴重な一年であった。

県庁には北海道から沖縄まで全国の自治体職員が派遣されており、それぞれの仕事の進め方、考え方も全く違うものであったが、時にぶつかり合いながらも、切磋琢磨しながら、「復興」というただ一つの目標に向かって前進することで大きな連帯感が生まれていたように感じている。一年の派遣を終えて東京に戻ってきたが、派遣されていた間に知り合ったたくさんの方たちとのつながりをこれからも大切にして、岩手と東京を結ぶ架け橋になれたらと思っている。遠く離れたところからでも何かできることは必ずあるので、いつも応援していたい。そして、何年先になったとしても震災前以上に素晴らしい場所になることを信じて、また必ず三陸に行こうと思う。

帰京時に、共に事業を進めた県庁職員から言われた言葉、「東京は岩手を助けてくれた。もし、東京で大災害が起きたら、自分は真っ先に東京を助けに行く。」これが、私が岩手に行った意味だと思う。